

ふとした発言が
思わぬ効果を生んだ!

患者さんを安心させた

キメ★台詞



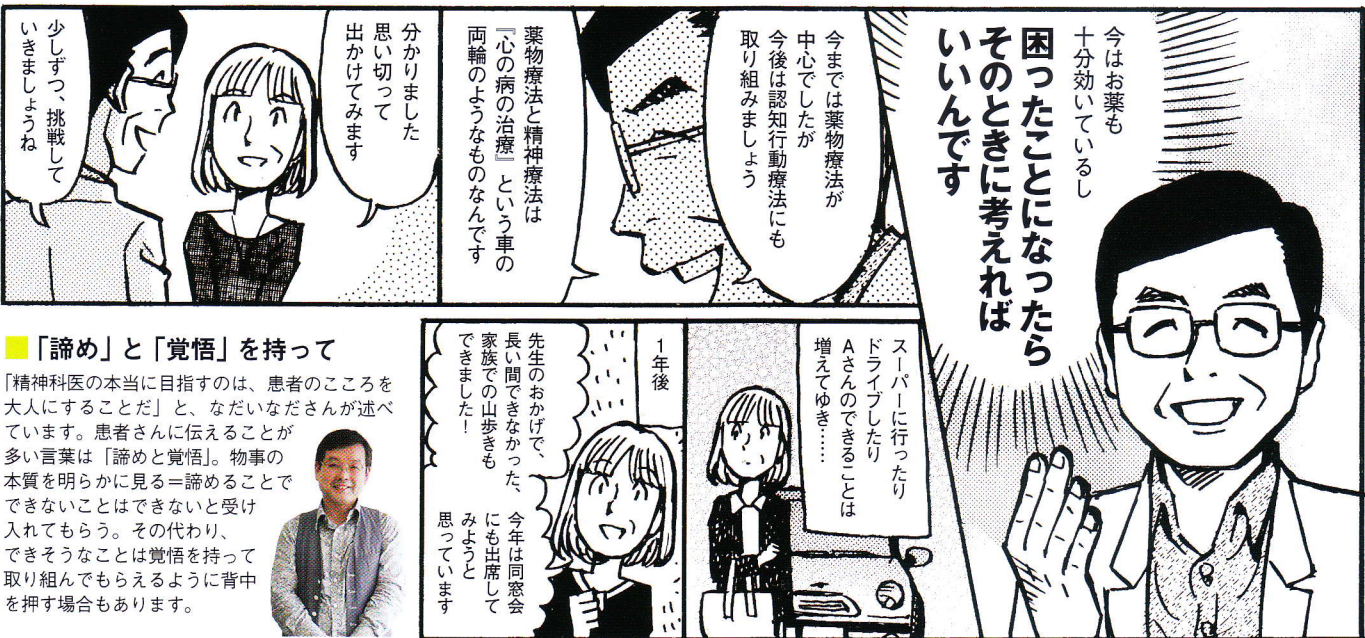
今週の主人公

医療法人社団楽聖堂
こころのクリニック山形
古沢信之 理事長



〈あらすじ〉

パニック障害の治療が不十分で一人では外出できないAさん。古沢先生と出会った後の経過は良好ながら、自信は持てないようで……。



「諦め」と「覚悟」を持って

「精神科医の本当を目指すのは、患者のここを大人にすることだ」と、なだいなださんが述べています。患者さんに伝えることが多い言葉は「諦めと覚悟」。物事の本質を明らかに見る＝諦めることでできないことはできないと受け入れてもらう。その代わり、できそうなことは覚悟を持って取り組んでもらえるように背中を押す場合もあります。



Doctor's Theater

今回の映画

「私は「うつ依存症」の女」



© 2001 CineNation Internationale Filmproduktionsgesellschaft mbH & Co. 1. Beteiligungs KG

あらすじ
自分に過剰な期待を寄せる母や音信不通の父との関係、うつ症状に悩まされている女子大生のリジー。さらにルームメイトとの友情が壊れ、次第に情緒不安定に陥っていく。

アメリカ / 2003年
約95分
発売元：(株)アートポート
販売元：ハビネット
価格：2500円



原題は、著名な抗うつ剤の名前を冠した『プロザック・ネイション』。女流作家エリザベス・ワーツェルが綴った自伝的小説を映画化した作品だ。口うるさい母親や勝手気ままな父との関係に悩みながら成長したリジーは、ハーバード大学に入学し、ライターとしての才

女流作家の自伝小説を映画化。
うつ病に悩む女性のリアルな日常

能を開花させていく。新たな環境での新たな生活は順調に思えたものの、うつ病を抱えた彼女の奇行によって周囲との溝は深まっていき……。主人公のリジーを演じたのは、『アダマス・ファミリー』のウエンスデー役で知られるクリスティーナ・リッチ。10代のころ両親の離婚を経験し、拒食症に悩んだこともあるという彼女はこの作品にほれ込み、主演を務めると同時に共同製作にも名を連ねている。そんなクリスティーナの演技はまさに演技を超えたリアルさで、情緒不安定で泣き叫んだり、激しく自分を責めたり、ときには自らを傷つけるリジーを見事なまでに表現している。原作者のワーツェルは、この本を書いた目的を「うつ病は生活を壊し、私がかろうじてそうだったように自らの命を奪ってしまふ深刻な病気だと伝えることだけ」と語った。たしかに、この作品は「症例」としてではなく、一人の女性が苦しみながら病氣と向き合う「日常」を垣間見せてくれる。うつ病の悩みを抱く女性の心情を理解したいとき、ヒントになつてくれそう。また、患者に対してどう接したらいいかわからない家族に、視聴を勧めてみるのもいいかもしれない。